

自然観察会「七ヶ宿町柏木山で風と鳥と自然を観る」レポート

現場を見て 理解を深める



MELON 風力発電推進プロジェクトでは、宮城県内での市民出資型風力発電の実現可能性を探るため、今年の 4 月から七ヶ宿町と共同で 1 年間の風況調査を行っています。9 月 23 日（祝）には、その調査場所である七ヶ宿町柏木山にて、七ヶ宿町と共催で自然観察会を行いました。参加者は 23 名で、町民の方、風力発電に関心のある方、自然保護に関わっている方、野鳥の会に所属されている方、MELON 会員の方など多彩な顔ぶれでした。

まず、七ヶ宿町の高橋國男町長のあいさつがあった後、風速計設置地点まで移動し、町職員の橋本秀勝氏からどのように風速を測定しているかについて

説明していただきました。その後、インストラクターの関川壽馬氏、関光洋氏、高橋千尋氏から鳥類観察方法について説明があり、双眼鏡、望遠鏡を用いて鳥類観察を行いました。エゾビタキ、トビなどの鳥が観察できました。天候が悪く多くの鳥は見られませんが、最後にはクマタカの飛翔なども見ることができ、鳥類の生態やそれらを保護する意義について学びました。また周辺の樹木や草花についてもインストラクターの方から解説がありました。

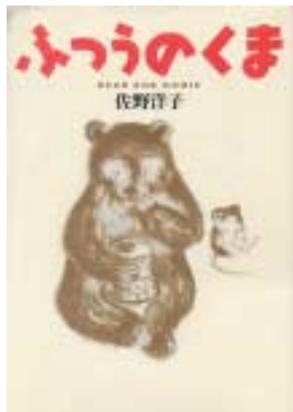
豊かな自然との共存を前提とした上で、自然エネルギーの重要性や必要性についても理解することができ、意義のある 1 日となりました。（事務局）



クマが おしえてくれるもの

広葉樹の減少など、山は次第に住みにくくなり、さらに今年は例年になく食料となるブナやミズナラなど木の実が不作で、クマが山を下りて人里におりてくる「事件」が頻発しています。この読み聞かせの第 1 回でイエルク・シュタイナーの「ぼくくまのままでいたかったのに」を紹介しましたが、わたしの子どもの本棚にはクマをめぐるお話がたくさんあります。クマと人間との関わりの中から人間の社会を映し出している宮沢賢治の「なめとこ山の熊」は高校の教科書にもなりました。この機会なのでクマにまつわる話を読んであげましょう。

佐野洋子 作「ふつうのくま」（講談社）。このくまは、おじいさんのおじいさんのおじいさんのおじいさんが空を飛んだという赤いじゅうたんが気になって、おいしいものをたくさん食べてもさびしいの



です。チーズを食べることで幸せになれる、いつもそばにいたネズミをおいて、くまはとうとう空を飛びました。

変わったところではイルマ・ラウリッセン作、中田和子 訳「クマがくれたしあわせ」（廣済堂出版）。これはクマそのものの話ではなく、「クマ」という名前の犬のお話です。人嫌いのおじさんが、「熊のように大きくなって、人をおどろかすぐらいになれよ」とつけた名前ですが、『クマ』はちっとも大きくなりません。それどころか町の人々に愛され、おじさんのところにたくさんの人が訪れるようになってしまいました。人嫌いのおじさんはたまりかねて『クマ』を捨てました。ところがしばらくすると、人々からはわすれられ声もかけられなくなってしまいました。寂しくなったおじさんの前に突然『クマ』が帰ってきます。おじさんは、自分の期待とは違ったけれど、それも楽しいものだということを知りました。



クマをめぐるお話は私たちに自然と人間社会のはざまで暮らすことのかなしさについてや、わたしたちが大切にしようとする「ゆうき」というものについてや、人生のたのしさについても教えてくれます。クマが里山におりてくる「事件」から、私たち自身を考える『事件』にしてみまじょうか。